

兵庫県現代詩協会 会報49号

2021年7月1日 発行：時里二郎

新役員体制のスタートにあたって

会長 時里二郎

昨年に引き続いて2021年度の兵庫県現代詩協会の定期総会は、新型コロナウイルス感染防止のための非常事態宣言の発令によって書面総会という形を取らざるをえない事態となりました。やむを得ないことですが残念です。今年度も、感染の状況をみながらの活動になると思いますが、どうぞ会員の皆様方のご理解とご協力をお願いします。

さて、今年度は先般の役員選挙によって選出され、総会でご承認いただいた新役員体制で発することになりました。清新なメンバーもいらつしやいます。これまで以上に、協会の活動が会員の皆様のためにお役にたてるようになればと念じています。

今年度の大きな活動の柱のひとつは、例年と同じように、『ふれあいの祭典・詩のフェスタひょうご』の開催です。今回の講演は、神戸市在住の詩人、高階杞一さんをお願いしています。高階さんの『キリンの洗濯』（第40回H氏賞）や『早く家へ帰りたい』などは、これからも長く読み継がれる詩集です。また『いつか別れの日のために』では第8回三好達治賞を受賞され、他にも充実した詩集を多く上梓なさっています。また、『ガーネット』は30年も続いている詩誌。さらに、詩誌「びーぐる」の編集同人でもあります。かねがね、詩についてのお話をうかがいたいと願っております。今から楽しみです。

また、今回のフェスタでは、新しい試みとして、高校生に自分の書いた詩を朗読してもらうという企画もあります。ご期待ください。

さらに、『ポエム&アートコレクション展』や読書会、文学紀行などもあります。これら当会の活動については、「兵庫県現代詩協会」のホームページに随時掲載しておりますので、ぜひ一度のぞいてみてください。

コロナ禍の早い終息を念じるとともに、皆様方のご無事を心から願っています。

第25回定期総会（書面）報告

4月25日緊急事態宣言が発令されて以来コロナ変異株の拡大は収まらず5月末まで宣言が延長され、総会は中止となり、昨年同様書面にて行うこととなりました。4月27日に総会資料を発送し、同封のはがきに議案議決事項について承認の可否を記入して5月15日までに返送をお願いしました所、101通の返信を得ました。現在の会員数129名中過半数を超え総会は成立。定期総会の議決事項は全て承認され、否認件数はゼロでした。よって承認された議決事項は以下の通りです。

議決事項

- ① 新役員・入退会の承認
- ② 2020年度活動報告

- ③ 2020年度決算報告及び監査報告
- ④ 2021年度活動計画案
- ⑤ 2021年度予算案

新役員（2021年度～2022年度）

- 会長 時里二郎
副会長 神田さよ
事務局長 山本眞弓
会計 玉川侑香
常任理事 大橋愛由等・大西隆志・和比古・北野和博・高谷和幸・野口幸雄・福永祥子・丸田礼子
監事 安西佐有理・梅村光明・渡辺信雄
中嶋康雄・福田知子
顧問 たかとう匡子・安水稔和（継続）

2021年度活動計画

- ・ 総会
- ・ ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご
- ・ ポエム&アートコレクション展（特別イベント）
- ・ 名簿発行
- ・ 会報発行（年2回）
- ・ 読書会（年2回）
- ・ 文学紀行
- ・ ホームページの活用
- ・ 理事会（常任理事会・詩のフェスタ実行委員会含む）
- ・ その他

ご協力ありがとうございました。
（報告：山本眞弓）



「ふれあいの祭典・詩のフェスタひょうご2021」予告

主催 ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご実行委員会・兵庫県・公益財団法人兵庫県芸術文化協会・兵庫県現代詩協会
 日時 10月3日(日) 13時30分～16時30分(受付13時～)
 会場 神戸市教育会館6F大ホール 〒650-0004 神戸市中央区中山手通4-10-5 TEL078-222-4111

第1部 講演会 講師 高階紀一氏(詩人) 演題「詩とは何か」

第2部 自作詩朗読会 高校生の部(新設)・一般の部

朗読申込 8月末までに奮ってご応募ください。(詳細は7月配付の案内チラシで)

フェスタ申込 9月18日(土)までに申込み葉書で申し込む(チラシに添付)

連絡先 事務局 山本眞弓 TEL 078-241-3086

高階紀一氏プロフィール 1951年大阪市生まれ

所属 日本現代詩人会・日本文藝家協会・日本音楽著作権協会(JASRAC)。主な著作 *詩集『キリンの洗濯』(第40回H氏賞)『早く家に帰りたい』『空への質問』(第4回三越佐千夫少年詩賞)『いつか別れの日のために』(第8回三好達治賞)『千鶴さんの脚』(第21回丸山薫賞)『水の町』『夜とぼくとベンジャミン』『空から帽子が降ってくる』(松下育男との共著)『高階紀一詩集』(ハルキ文庫) *詩画集『星夜 扉をあけて』 *散文集『詩歌の植物 アカシアはアカシアか?』 *共編著『スポーツ詩集』(川崎洋・高階紀一・藤富保男) *戯曲『ムジナ』(第1回キャビン戯曲賞入賞)『雲雀の仕事』他

■第19回読書会

報告・青木左知子

『石牟礼道子の作品について』チューター…丸田礼子

11月28日(土) 13時 神戸市教育会館404号室

新型コロナウイルス拡散第三波の只中にも関わらず、『苦海浄土』に導かれて27名が参集した。

丸田礼子氏は読書会担当で、チューターを依頼する立場ながら、コロナ禍中にあることを慮り、自らにその任を課しての登壇となった。石牟礼道子には以前から強く心惹かれていたが、存在の大きさに圧倒され、読み方を誤りはせぬかなどの恐れから、その作品を取り上げるのを躊躇していた。が、百人の読者がいれば百通りの読み方がある。当然、異なる読み方の中で真摯に語り合えれば、『苦海浄土』を取り上げることにはたとえて本題に入った。

まず年譜を説きながら『苦海浄土』執筆へ石牟礼を突き動かした力とそれを書き得た資質が幼少時の環境や体験に基づくことに触れ、特に視力を失った上に精神をも病む祖母に寄り添った日常を、エッセイ「愛情論」の中の切々たる言葉を引いて紹介された。また、自分を可愛がってくれていた近所の若い遊女の惨死という凄まじい出来事など、切り裂かれた人間世界の様々を幼くして体験したことが、後々、水俣病患者やその家族たちの痛み苦しみの強い共感に繋がっていったという。石牟礼は八歳のとき家の没落によって水俣川河口の村に居を移すが、すぐ近くには渚があり、そこでは自然、生き物たちとの深い交歓を体験する。それが豊かな詩情の原点となったともいう。人の世のおぞましい出来事の見聞と、渚での自然界との親密な触れ合い、この言わば相反する体験が融合して、弱者への共感性、『苦海浄土』を書き上げる力となったのである。

話題の中心は第三章「ゆき女聞き書」に置かれた。この章が第一・二章より先に書かれ、ここを原点に作品世界が広がっていったことによる。資料として示された患者や

その肉親の心情が、丸田氏の、朗々と、だが哀切に満ちた声調で強く聴く者の胸を突いた。だがそれは彼らの言葉ではないことを知らされる。ここに登場するのは言葉を奪われた人々だからだ。その語り得ない人間の声を如何にして聞きとるか、それが重要と氏は強く説かれる。石牟礼は通りかかった病室の半開きのドアから自分に向けられた見えない目の中に決して往生

できない魂魄を見る。そしてそれが全部自分の中に移り住んだと本書で述べている。つまりこの釜鶴松の心情も坂上ゆきの言葉も、冒された者に成り代わっての石牟礼の声なのである。筆記具を持ち、録音機を携えて患者たちの許を訪れたのではなく、それとなく静かに相手に触れてその心の内に入り、その人に成り代わって語っている石牟礼の言葉なのだ。故に、ここには記録ではない、文学としての『苦海浄土』があるのだと強い口調で語られた。

ある批評家が『苦海浄土』執筆の動機を問うと「新しい詩の形を示してみたい」と応えたという。新しい形式とは単に文学の一形式ではなく、文学の根源的な精神の結晶としての形のことで、確かにそのように読める作品だとした上で丸田氏は、新潟日報に掲載された石牟礼の言葉を加えられた。それは「あなたにとって詩とは？」と問わ





同アンソロジー詩集は隔年で編集・発行され、2020年度に発行しました。会員のみなさんの作品を掲載・公開できました。(担当…大橋愛由等)

■『ひょうご』現代詩集2020』

2021年8月1日(日)に神戸市教会館203号室で開催予定です。「高階杞一の詩について」(仮題)、ユーター…神尾和寿。追って詳細を案内します。

■第20回読書会予告

2021年8月1日(日)に神戸市教会館203号室で開催予定です。「高階杞一の詩について」(仮題)、ユーター…神尾和寿。追って詳細を案内します。

れての応え。(近代詩などは)全く違った表現が欲しかった。水俣のことは近代詩のやり方ではどうしても言えない。闘いだと思った。一人で闘うつもりだった。今も闘っている。亡くなる2年前(88歳)の言葉。衰えていない強い力、光輝く力、と丸田氏は賞賛。更に、これまでに『苦海浄土』はすいすいと読めなかった。今も同じだ。しかしそれでよい。立ち止まりながら、自身の中で対話しながら読んでいけばよいのだと背中を押してくれた本がある。それを心に留めて今後も石牟礼道子の長大な詩を読み続けたいと思う、と自らの決意のかたちで講話を結ばれたが、それは、『苦海浄土』はもとより他の石牟礼作品に向かう姿勢を我々に示されたものでもあるとして、深く心に収めた。意義深い会であった。質問や意見、深い内容に触れた交換も盛んでしたが、字数の関係で割愛したことをお詫び申し上げます。

■第10回ポエム&アートコレクション展

今年度も1月14日から19日まで、会員の詩人が綴った詩とその詩に寄せたアート作品(絵画、書、オブジェ)を組み合わせた展覧会が神戸文学館で開催された。会期中、137名の来館者で盛況だった。出品者…阿部由子・大西隆志・大橋愛由等・和比古・高谷和幸・玉井洋子・玉川侑香・寺田操・永井ますみ・中島友子・中堂けいこ・坂東里美・福永祥子・松下玲子・水こし町子・山本眞弓・吉田定一 以上17名(担当…神尾和寿、北岡武司)



特別イベント 講演会

報告…武内健二郎

演者…時里二郎 「詩を書くということ」第2回

2021年1月16日 14時~15時半・神戸文学館

前回からの続きで、詩の言葉についての興味深い考察がなされた。冒頭、阪神淡路大震災の経験が多くの詩の原点になっているのではないかと指摘された。また、いまだに続くコロナ禍における身体の制約が、詩の言葉を生み出しているのではないかと、具体例として投稿詩が紹介された。

コロナ禍において、政治家が国民に語りかける言葉についても話題になった。多和田葉子によると、ヨーロッパでは詩の朗読が日常的に行われる文化があるという。それは日常の言葉、政治の言葉、詩の言葉に仕切りがないということでもある。それに対し、日本では詩の言葉が日常から隔てられた閉塞的な状態にある。熱のこもったメルケル首相の言葉に対し、菅首相の言葉は伝わりにくいと批判があるが、日本における政治の言葉は貧しく、そこでは「思いの入れ物」としての言葉が機能していないのではないかと演者の見解であった。確かに、ケネディ

やアップルの創業者であるステイブ・ジョブスなどの言葉を聞く時、彼らが詩的な言葉で語りかけ、人々がそれを自然なものとして受け入れる土壌が西欧の社会にはあるように思える。

演者はまた、次のようなことを語った。震災、戦争、疫病など様々のカタストロフと詩も無関係ではありえない。樫木野衣によるとカタストロフの後には芸術の分野でも変化への動きが出るという。18世紀、リスボン地震の後、哲学や文学の分野で神の善意への疑念が生じた。安政地震の後では狩野派の活動に変化があったという。またスペイン風邪の後シユールリアリズムやダダの運動が起こった。これは疫病を防ぐため人々は引きこもり、それが人間の内面に影響を与えたのではないかと言われている。

コロナ禍においても、今までは違う異質の状況を、人々は身体感覚(＝前言語的な感覚)で捉えているようだ。生きていることを確かめ合う＝身体に触れる、ということもできないところから詩の言葉が出てきている。引きこもりという身体的な制約が人間の内面に新しい領域を広げるのかもしれない。

最終戦争の炎の7日間から1000年後、腐海が世界を覆うが、そこで生きることを選択する『風の谷のナウシカ』(宮崎駿)、ぬか床から人が生まれるという『沼地の森を抜けて』(梨木香歩)、そして希望を語った『希望』(杉山平一)、これらの本が引きこもりの時に読むべき三冊として挙げられた。災厄の中でこそ、生命、希望と言った言葉の本来の輝きと力を感じすべきだ、という、演者の意図を感じた。

書き手の身体から生まれた詩(言葉)は、詩(言葉)の身体を得て、書き手である私を超えた世界に立つことができる。それが詩を書くということである。詩に託す思いの熱が言葉に命を与え、すぐれた詩は読む人に言葉以前の感覚を触知させることができる。という時里さんのメッセージをこの講演を通してしっかりと受け取ることができた。



■第7回文学紀行 報告・浜田多代子 《姫路文学館・姫路城周辺をぶらり歩き》

2021年3月14日

姫路駅中央改札口は、コロナ禍でもありマスクの人たちだらけ。私はリュックを背負い軽装の仲間の集団へ、手を上げ合流した。ナビゲーターは大西隆志さん。総数12人、姫路駅からバスに乗り、目指すは世界的建築家、安藤忠雄の「文学と対峙する空間、城を回遊する空間」として設計された姫路文学館へと直行した。

コンクリートの打ちっぱなしの建物は、姫路城を借景にして座し、白い砂利を敷いた人工の川に沿って歩くと、没後60年記念、21歳の若さで自らの命を絶った夭折の歌人、岸上大作展が開催されていた。

天井から垂らした布に短歌が大きく書いてあった。

生きている不潔と結ぶたびに切れ

ついに何本の手はなくなるとも

ガラスのケースには、刊行された本、手紙、原稿用紙の手記、絶筆は「ぼくのためのノート」。

青春の真つ只中、純粹に生き、悩み、愛を知り、そして死んでいった短い人生。すべての人が歩んできた青春の一部分でもある。

会員たちの声が、マスクからささやくように聞こえる。集合時間までは、あつという間に過ぎた。

お堀沿いに姫路文学館よりぶらり歩き。堀には鯉が泳ぎ、近づく餌を求めて集団でやってきた。鯉の中に人面魚がいると、女性の会員が指をさした。いつとき巷を驚かせた人面魚。懐かしい。

ここからはナビゲーターの大西隆志さんの登場である。船場川の清水橋近くに阿部知二の文学碑があった。大きな石に密着するように石碑がある。

「城―田舎からの手紙―より」と刻まれていた。シロトピア公園には有本芳水、三木露風との合作の詩碑もあった。

「白鷺城回想の賦」

女性の会員が読むにつれ、みんなの声が一つになった。シロトピア公園にはもう一つ迷物？がある。

黒川紀章氏設計の休憩所「扇観亭」である。近隣の人たちには、別名「2億円のトイレ」と言われ、建物には、たくさんの方が見るためにやってきたと評判になった。

「あれ、もう桜が咲いている」

桜並木道はまだつぼみは堅かったが、一本だけ満開の桜があった。

早速ナビゲーターさんは、散歩されている方から「この桜はソメイヨシノで、毎年一番早く咲く」との情報を出された。

少し行くと左手に、兵庫県立歴史博物館があり、右手に赤いレンガの建物がどんと現れた。姫路市立美術館だ。

明治時代、陸軍の兵器庫、被服庫として建てられた。戦後、姫路市役所の庁舎として市民に親しまれ、現代は、姫路市立美術館として生まれ変わっている。

赤レンガの壁は、趣があり、一瞬異国の景色と見間違ふ。広い庭園には、彫刻がよく似合う。

ぐるりと歩くと、国宝姫路城（白鷺城）がずつついてくるように思えた。お城は前後左右の表情を惜しげもなく見せてくれる。

姫路駅からは表面の表情、姫路文学館からは左斜めの表情、シロトピア公園からは後ろ姿の表情、姫路美術館からは右斜めの表情。どこから見のお城も優雅さは見劣りしない。ぶらり歩きで、お城を堪能したのは、私一人ではないだろう。

昼食は福亭での食事。楽しい語らいは続く。青春時代の恋愛論まで聞くことができ、会員の近況などもあり、おいしい食事の時間は和気あいあいだった。昨日まで雨模様だったのがウソのように晴れた。会員すべてが晴れ人か、普段の行いがいいのか、そぞろ歩きには格好の上天気だった。

帰宅して万歩計を見ると、なんと1万歩も歩いていた。

■寄稿 「歌謡曲」

田村周平



昭和39年、ぼくは六年生。当時、歌謡曲は街中に溢れていた。西郷輝彦、三田明、橋幸夫、久保浩、梶光夫、ぼくらはすべて歌うことが出来た。修学旅行が近づいたころ舟木一夫が現われた。高校三年生は六年生のぼくらにもびつたりの歌、音楽の授業では一人ずつ菜の花畑を歌わされたが、中西君はどうしてもコブシがついてくる。何度注意されても治らない。他の歌に変えても同じだった。カトレアのように派手な人スズランのように美しく、また忘れな草の花に似て気弱で寂しい眼をした子、そんな子がクラスに一人はいた。中学から男子校だったからほかは他の学校にそんな子を捜さなければならなかった。京都で浪人生活をおくったが、そのころはよく寮歌を歌った。第一第三、数字のつく旧制高校の寮歌を順番に覚えた。場末のスナックでもカラオケが始めで、マイクの電

源だけ入れてもらって歌った。そこで誰に教わったか春歌というものがあつた。

ここは山科京都のはづれ
京都名物兄妹心中
兄は十八その名を昭夫妹十六その名を昭子
兄は妹を妹は兄を
好いた惚れたで病になりぬ
兄の病を妹がみもて
医者にしようか薬にしよか
医者も薬もどちらもいらぬ
せめて今宵はお前と寝たい
赤い禪はらりと落とし
妹どこよとまさぐる昭夫
「赤い腰巻はらりと落とし
兄さここよと指さす昭子
これが世間のうわさとなりて
あわれ二人は兄妹心中

雨のしよぼしよぼ降る晩に
ガラスの窓から覗いてる
満鉄の金ボタンの馬鹿野郎
上がるの帰るのどうするの
早く精神決めなさい
決めたら下駄もって上がんなさい
お客さんこのごろ紙高い
一円五十銭はらいなさい
くれたら私も精だして
かしわの鳴くまでボボするわ

この二曲は今でも歌える。春歌は口伝えだから歌詞も楽譜もない。ぼくももう伝える機会もないから、やがて消えていくだろう。と思っていたら久世光彦のエッセイに二番目の歌が出ていた。高橋クミコという歌手がレコー

ドに残している。作者不詳だが曲は藤原義江が歌った討匪行だという。ぼくが覚えていた歌詞と少し違うのだが、口伝えとはそういうものだろう。

ところで残るといふのはどういう事だろう。詩の場合には。現代詩はリズムや韻律より意味思想に重きを置き、また意味そのものを壊すことが多い。難解だから読者がいない。読者がいなければやがて消えていくだろう。

詩が、残るためには世の中で享受されそこで生きていなければならぬ。詩が享受されるとはどんな事か。例えば居酒屋での会話、誰かが箸を立ててほらほらこれがぼくの骨、やがて外にはみかんのような夕陽が沈むかも、やっぱり中はいいいね、こんな会話があちらこちらで聞かれる。

とはいえ詩を書く者にとって残る残らないはあまり意味がない。そんなことは気にせず、それぞれ自分の詩を書いているのだから。けれどもこの時代の詩で残っていくのが歌謡曲の歌詞ばかりとしたら淋しいことだ。

■会員の詩集評

時里二郎

◎芝本政宣(柴田実)『神戸・姫路の画家たち』(神戸新聞総合出版センター・2020年8月)。芝本さんは、詩誌「火曜日」の同人だった柴田実さんの本名。これはその美術エッセイ。とりあげられているのは鴨居玲、西村功、昇外義、酒井抱一。神戸・姫路ゆかりの画家が中心だが、ほかにも有元利夫や平家納経なども。まず、芝本さんの思い入れの強い鴨居玲についてのエッセイがはやり読み応えがある。彼の絵に「強烈に魂に迫り、魂をつかんで放さない力」を感じるといい、「苦闘し苦悩する絵、哲学する絵」として鴨居の画をとらえている。また、彼の突然の訃報を聞いての感慨とともに、鴨居の作品への愛着と神戸との関わりについて述べるところなどは、芝本さんの思い入れの深さがよく出ていて格別興味深い。他にも、彼のサインが、「Rei Kamoi」から「Rey Camoy」へと変化する

るのだが、そこに「日本という狭く特殊な社会から、普遍的ともいえる西洋社会へ。鴨居の決意と自信の現れのように思える。」という指摘など、なるほどとうならせる。一方、昇外義や細見則夫といった評者の知らなかった画家についての文章も新鮮でひかれた。近現代の画家のみならず、酒井抱一や南蛮美術、平家納経など日本美術についても、とりわけ酒井抱一の画業について、教えられるところが多くあった。評者の好きな画家でもある有元利夫や小野市の、快慶ゆかりの浄土寺についても触れられていたりして滋味溢れる美術エッセイとして楽しむことができる。

◎牧田榮子『倉橋健一の詩を繙く』（澤標・2020年1月）。倉橋健一さんの詩を実に丁寧に読み込んだ牧田さんのこの本を読んで、あらためてこの詩人の詩の言葉の奥に潜むもの——詩を支えてきた《梁》のようなものに深く触れる思いがした。「わたしの「読書ノート」から」とあるように、形の整った評論ではなく、心曳かれた作品について、時間をかけて読み込んだ思索のあとが、そのままノートの文体となつて現れている。一つの詩句にこだわりの、そこから倉橋健一の詩精神を読み取るうとするアプローチの仕方は十分説得力がある。例えば、「おぼばの美しい話」の中に「いのちを開けつ放しにしてた」というフレーズがある。そのために「父御」がいのちを落とすのだが。「草食獣は本能的に身を護る術をもっている筈なのに、なぜ、だいたいな命を「開けつ放しにしてた」のだろうか。はたと息をのんだ。「父御」は決して無防備ではなくて不意打ちをされた。恐らくそこはいくさの場だった。防ぎよのない所に命を置かなければならない戦場という場をおもう。戦争は人がつくりあげ、どんな理屈も正当化させ理性を見失い弱肉強食の牙をむき出しにしよう。いのちを開けつ放しにしていた」のはこの事だろう。そうして「父御」はやられてしまった。赤ん坊とおぼばという組み合わせの先にわたしはこの家族のふるさとを思い描き、

そこに年月やひとたちが交叉した歴史を考えずにはいられない。これは、倉橋健一の重要な最近の二冊の詩集『唐辛子になった赤ん坊』『失せる故郷』所収の詩について考察しているなかの一節だが、特に牧田さんは、「おぼばの美しい話」に、亡き父への思慕と追悼のうただという読み取りかたをしている。牧田さんは、評者の印象ではこの「父」に対する倉橋さんの眼差しに特に注目しているように思えて目をひいた。この詩集が「詩のかたちで自分史を編んでいる」という指摘は重要だ。また、「サイ転がし」を通して、倉橋さんの孤独について語る一章も、倉橋さんの詩の魅力の一端を鋭くとらえていて読み応えがあった。

◎紫野京子『霧の馬』（編集工房ノア・2020年12月）。第9詩集。前詩集『切り岸まで』も、この欄で評したが、そのとき「生と死、此岸と彼岸との往還によつてもたらされる深い陰影に充ちた抒情の世界」と評者は書いている。この詩集では、もはや往還ではなく「たゆたい」。そのたゆたいのなかに深い鎮魂の思いが満ちているのが特徴だろう。もちろんそこには東日本大震災の記憶が強く影響しているが、それだけではない。生きるということが、死者を思うということとどうかわるのかを問いつづける静かな思索の言葉。詩集の後半は、さらに普遍的な、人の生きることのかなしみを、失った大切な人の魂との対話のかたちで深めていく。「深い森のなかを歩いてゆく／陽も射さない暗がりのなか／湿った苔の道を歩く／誰もいない孤りの道を／前を向いて歩くためには／満たされた日々と／陽の輝きの思い出が要る／／ひとは壊れてゆく生きものだ／それぞれの思ひ出が要る／／ひとは壊れてゆくときに／はじめて それに気づく／／ましてすべての人が／同じかなしみ 同じ苦しみを／抱えていることに気づくのだ／／ひとは独りで 生まれてくる／／そして生きていく／また独りになるために／／けれどおもしろいだけ残る／逝く者の心にも／残された者の心にも」(「おもしろい」全編) いうまでもなく、その「おもしろい」こそが、

紫野さんにとつての詩に他ならない。「年老いて／現実(うつつ)に生きることが 夢となり／日々を 夢のなかで 生き続ける」(「風の音」)。自分の手のなかにある言葉でこれだけゆたかで情感深く、格調ある抒情の音楽を響かせる紫野京子さんの詩業は貴重である。

◎渋谷魚彦『青をあおぐ』（澤標・2020年12月）。第2詩集。タイトルの「青」とは青空のことだが、渋谷さんは、この青の向こう側の宇宙の闇を見ている。「青空の奥に闇空が存在している」「白昼の世界へ外部からかぶさつて来るもの／それは無限の宇宙の夜の闇 息を声を殺された沈黙」(「青と闇の宇宙」) 渋谷さんのこの地球観＝天体観は、そのまま彼自身の孤独感と結びついて、独特の詩境を作品に刻印している。「あまりにも大勢の「たつたひとり」たちが／個々に怪しいその胸を／柔らかな衣服の布に包んで歩いている／／それぞれの方角に向かつて散らばりながら／散らばった先で出会ったりもしながら／彼らとはひよつとするとこの世の中の「みんな」？／／誰もが連れもない単身で 市街の午後をゆく／身体が単身なら心は駆け引きなく単心だ／／なんとか自分の孤独を自分に隠して」(「あまりにも」)。このモノトーンな、あまりにもさびしすぎる心象風景が、この詩集の中に次々と現れる。例えば、「この誰が誰でもなくすれ違いつづける人々／彼ら 灰色の顔の群れ／あるいは風貌を持たない人間たちの氾濫／／誰が誰でもないような無数の者たちが／互いに互いの中に埋もれて／記憶の背骨を打ち砕いて通行する世界」(「薄暮」) ここに描かれる「灰色の顔の群れ」「風貌を持たない人間たち」——これらはおそらく渋谷さんの自画像でもあるかもしれない。なぜなら、彼にとつて、他者は存在しないからだ。だから「誰もか」という「誰も」は、夥しい鏡に映った彼自身の分身にほかならないという気がするのだ。とても真摯な自分自身との向き合い方がぶれることなく詩集を貫いているし、この時代に生きる私たちの存在についての認識の危うさや貧しさを

への警告には説得力はあるが、それ以上に彼の心をおお
う孤独感にもうひとつ共鳴できないのはなぜだろう。

◎高橋富美子『夢泥棒』（思潮社・2021年3月刊）。第
4詩集の『子盗り』で富田碎花賞を受賞なさって以来の第
5詩集となる。この詩集では、オノマトペが跋扈する。ま
ず、冒頭の「ののがある」から引き込まれる。「ののあ
る」という、鬼か、悪霊か、――要するに名付け得ぬもの
のたぐいを、オノマトペで表したものとひとまずは言え
るだろう。それには、ノアール（黒）、とか、あるいは朔
太郎的なオノマトペをも想起させる。次の「緯度」では、
「あんぎゃんぎ」という、これはヒトか？語調から沖繩
戦で亡くなったヒトの魂か。さらに次の「こんな夜には」
では、「ぼおおお／ぼおおお／ひでぼが泣く」。高橋さん
の詩は、このような不穏なオノマトペに特徴的にあらわ
れているように、私たちの言葉の届かない世界――とりあ
えずは《異界》とっておくが、その異界とこちら側とを
行き来している。いや、むしろ異界の領域へとすつぽりと
入り込んでしまっている作品も多い。東日本大震災や阪
神淡路大震災や、先の戦争によって、理不尽な死を死んだ
者たちと無縁ではありえない。高橋さんの詩にとつて、こ
のようなオノマトペは、異界との境界を取り払って、死者
の魂と呼び交わすための言葉の装置と言えらるだろう。し
かし、そうやって死者を呼び覚ますのは、鎮魂のためばか
りではない。わたしたちが死者の魂に祈るだけでは癒さ
れない大きな、得体の知れない深い闇の領域がすでに日
常に潜んでいることを、詩は知らせようとしている。短め
の詩を一編引用する。「泥んだ茜色の空を／いましがた／
犬やネズミや恐竜／化け物などが渡っていった／列を
離れた／喋りたがりの鳥が／嘴で窓をつついて／星の異
変を告げにくる／タグボートの軍団に先導され／黒い覆
面の舟が／動かない速度で浮かんでいる／完成しない
詩をまえに／乾いたボールペンが／部屋の隅でキキコと

啼いた（「ゆうまづめ」）。前詩集をしのぐ出色の詩集とな
った。

◎猪谷美知子『蝙蝠が歯を出して嗤っていた』（澤標・2
021年4月）。第3詩集。意表をつくようなタイトル。
猪谷さんの詩は、見た目には通常の詩のように見えるの
だが、どこか独特な眼差しというか、詩を取り出す切り口
がユニークだ。例えば、冒頭の「あ・うん」「この「あ」
はなんだろう／「うん」に近づいて／口づけをしてこそ／
呼吸も合うというもの」。こういうあつげらんとした発
想が、とても自然なユーモアとなって、詩をかるやかに動
かしている。「石で作られた哀しさ／欠けていくのは／鼻
柱くらい／「あ」も「い」も／思いのままにならない」と
続くのだが、さっきのユーモアに添ふ「哀しみ」が詩に情
感の陰影をくわえている。この自然なユーモアと、そつと
ほの見える人間というものに対する哀感の調子が、猪谷
さんの詩の味わいを作り出す。「キリンの首に似て」も、
そんな猪谷さんの詩情がとても味わい深く現れた佳品。
山椒の女木が蔦にからまれて瘦せほそってしまったとい
う話題から始まる二連に続いて、とつぜん「だれも逝か
んとして／とやうてくれへんかった」と、ひっそりと亡
くなったひとり住まいの女性のことへと詩は急展開する。
以下を引用してみる。「雨戸に書かれた心の指文字／気づ
かれることもなく／ひとり住まいの中村さんが／閉めき
った家の中で／逝った／／新芽も枝葉もない／高い乾い
た幹／老いたキリンの首に似て／（略）／中村さん／今日
も／濡れた座布団の上で背を丸めて／キリンと／目を／
見つめあいながら」。山椒の瘦せ細った木を「キリンの首」
と例えたのには、意表を突かれた。どこことなくユーモアを
含んで、それでいて哀れを誘う独特な比喩がよく効いて
いて、その比喩の妙味が、最終連で、中村さんと「キリン」
とを対座させる絶妙のポエジーを生んでいる。

◎高木敏克『発光樹林帯』（澤標・2021年4月）前作
の『港の構造』（航跡社2018年）は確か小説十編を収

めた短編小説集だったが、今回は「詩集」と銘打ってある。
しかし、なかほどの「銀河航路」から「ロードス島」に続
く一連の作品は小説となら変わるころはない。他の
作品も掌編や小説の挿話にも十分使えるものが少なく
ない。しかし、あえて「詩集」と言うのには、小説的なもの
から逸脱していくものを、高木さんが強く感じている
からに違いない。小説というジャンルの枠には収まりき
れないもの――それをどう作品化するかというのが、今回
の作品集の狙いなのではないか。つまり、詩へ移行してい
くのではなく、詩との境界、あるいは小説と詩との汽水
域にとどまって、あらたな表現の世界を構築していくよ
うな印象である。この散文と詩のどちらともつかない浮
遊感、彷徨感覚は、高木さんの従来からのモチーフである
夢魔的な世界、あるいはカフカのといつてもいいが、現実
と夢との境界が取り払われてしまう世界と通底してい
るのは言うまでもない。そして、この夢と現実とがまざりあ
う夢魔的な世界は、表題作の「発光樹林帯」では次のよう
な感慨となって記されている。「何も見ない胎児の時には
夢など見ることなく、夢がわたしを見続けるのだと思
う。みずから目覚めることもなく機内アナウンスに起こ
されても、夢の中に目覚めただけで、実は子宮のなかで眠
り続けているのかもしれない。（略）このような感覚は海
外旅行の飛行機の中でだけ時々起こる母胎帰帰の感覚な
のだ。」現実が実は夢の中で目覚めた世界であるという感
覚――それは《記憶》というものと深いつながりを持つも
のと思われるが、それを高木さんにとつての大学闘争の
記憶と重ねるとき、これまでとは違う相貌を見せる。先ほ
どの「発光樹林帯」は終盤で一気に三里塚闘争の時間のな
かに落ちていくのだが、さきほどの《母胎帰帰》の感覚と、
三里塚闘争のリアルな記憶の世界とが強く衝突しあう感
覚は確かに凝縮された見事な詩的表現だろう。また、そこ
には、「夢とは誰かの記憶の中に目覚めること」という言
葉も書き付けられている。この作品のあと、一連の学生運
動の記憶から紡ぎ出された連作が続くのだが、それらが

明らかに行を分けた詩のスタイルで描かれていることに注目したい。小説ではどうしてもこぼれてしまう鎮魂としての記憶の容器を二重三重に頼みしつづ言葉を選んでいるのは印象的だ。なお先に述べた「銀河航路」などの《航海もの》はやはりおもしろい、高木さんの独壇場だ。

◎和比古『蒼き旅』(遊文舎・2021年4月)。第7詩集。

マルという犬を心の友として旅を続けるぼくの旅——というのがモチーフ。ひとつの物語として構成されている。和比古さんの『人間の構図』という詩集を評したとき、「和比古さんの詩のよさは、なによりもその人間性の誠実さを疑いもなく信じていることができる」とある。人間社会の不条理やゆがみを、人間の中に見出しつつも、それを克服することができるといって、揺るぎない強い思いを祈るように言葉に託す姿勢に心打たれる。」と書いた。この詩集を読んで改めて思ったのは、和比古さんの孤独の深さというもの。それは犬のマルと心を通い合わせるというところからの照り返しとも言おうか。和比古さんの誠実なヒューマニズムや向目的な人間肯定の信念のようなものとはうらはらに、詩集の背後に通奏低音のようにひびいてくる孤独と寂しさ。自分と似た境遇をマルに感じる場面があるが、彼のヒューマニズムの原点がどこにあるかを考えさせられる。この詩集の世界が大きな変容を見せるのは「幻想の森」が出てくるところからである。今はそれ以上は踏み込まないが、少なくとも、「幻想の森」によって、和比古さんの「孤独感」は克服されていく。つまり、この詩集のテーマは、自らの孤独感、孤立感をどう乗り越えるか——ということにあるのかも知れない。もちろん、それは詩を書くということの巧妙なメタファーにもなっているのは言うまでもない。

*お送りいただいた会員の詩集やエッセイ集、小説などの単行本について短評を書いています。もし、お送りいただいているのに短評がない場合は事務局までご連絡下さい。

■追悼 谷田寿郎さん 三宅 武

谷田寿郎さんの訃音は、山本事務局長の電話で知った。同日、和比古常任理事から追悼文の依頼。米寿目前のぼくが、重い気持ちで書くことを許してほしい。歿くなられたのが昨年4月とは。選挙用名簿に名前が残っているのだ。

谷田さんは、お住まいの西宮がお気に入りだった。

兵庫県現代詩協会発足のきっかけ、アート・エイド・神戸の『詩集・阪神淡路大震災』第一集所載「生還」では、西宮神社。嘉永四亥歳播磨屋安兵衛の常夜燈、安政七申歳の常夜燈の横倒しを書いた。

第二集の『シユロの日曜日』は、千歳町の喫茶店「ラ・パボニー」(1934年開店)が全壊。瓦礫の中から運び出された大石輝一画伯の遺作「教会の見える夙川風景」(自画像)は喫茶店あとを更地にしたテントでの、遺作展。かつて野坂昭如、小松左京、山下清もこの喫茶店に来ていた。「ラ・パボニー開店」の1934年は、谷田さん、現代詩協会の会計担当だった小西誠さんとぼく、シヨウワ・ヒトケタ族だ。

第三集『一本松』は、常磐町に残る古松。律令の昔から武庫郡と菟原郡の郡界の目印。薄田泣菫、森田たま、谷崎潤一郎、激震に耐えた二十体の石仏。

三篇に通じる印象は、場所のいわれを熟知していて、自身でも出向いていたから書けたのだと思う。

谷田さんは、1997年兵庫県現代詩協会発足の時から委員を引き受けている。着実誠実な人柄が引き寄せた役割だった。協会発足3年目から始まった「詩のフェスタひょうご」では、高校生をふくむ成人の部の選考委員代表も勤めた。

2010年「ひょうご詩画展」を前に、読売新聞から取材に来られたとき、谷田さんは国鉄退職後の、第一管理棟に勤めておられたが、早退してぼくの自宅で一緒に会ってもらった。

記者は、「神戸詩人事件から70年目です」と言う。小

林武雄先生の生前に直接お聞きした話を思い出しながら、それを語った(ような気がする)。

この年の詩画展テーマは、1945年から1960年までの15年間をテーマにしていた。ぼくたちはそれを中心に語った。記事になったのかどうかは、不明である。

谷田さんの詩集は一冊。『とりこえの空』神戸現代詩叢書⑩である。紛失したことを悔いている。

鳥取県出身、谷田さんの詩の世界だった。北へ帰る渡り鳥が、重く膨らませた腹で、稜線すれすれに飛ぶ「雁の腹すり」という言葉もこの詩集で知った。

話はさかのぼる。谷田さんと知り合ったのは1983年6月「第三期層」17号であった。お互い四十代後半だった。詩は「鳩の真似」。エッセイは「風花雪月」であった。

当時、詩は合評していたが、エッセイは論じなかった。「風花雪月」は『問はずかたり』を取り上げていた。

十四世紀初頭の古典。内容を紹介し、二十世紀の眼で感想を述べている。あとで分かったが、『問はずかたり』は、1950(昭和25)年、宮内庁書陵部蔵唯一の写本により活字本として刊行されている。ぼくは藤本義一記念館展示の、厚さ5センチほどの本を見たことがある。

谷田さんは、岩波文庫版と書いている。僕がもっているのは、2013年版。谷田さんは1968年版だろう。

「第三期層」32号で谷田さんは、国鉄が生んだ労働者詩人浜口国男を取り上げた。有名な詩「便所掃除」を紹介。浜口が天王寺駅から金沢車庫へ転勤した1953年谷田さんは日本国有鉄道に入社。浜口と一度会っている。浜口が国労文芸年度賞一位入選の年、谷田さん二位。翌年同賞で彼が二位、谷田さんは三位。因縁浅からぬ先達だった。初めて出会ったとき、谷田さんは国鉄マンだった。「第三期層」1987(昭和62)年12月刊26号(当時の編集・発行はたかとう匡子)に谷田さんは、エッセイ「ラーメン太郎覚書」を書いた。

1985(昭和60)年1月、国鉄民営化の動き。これ

に批判的だった総裁を中曾根康弘が更迭。7月、国鉄再建委員会は、「六分割」と「貨物一」を提言。

時代を背景に「国鉄マン、妻子殺傷事件」。以後国鉄マン自殺はあとを絶たなかったが、家族を巻き添えにした例は衝撃的だった。

加害者は「ラーメン太郎」と呼ばれていた。食事代俵約。即席ラーメン常食。生活全般も儉約。制服のまま通勤。相談所で知り合って結婚。時に蓄財は千数百万円。

谷田さんは「関西鉄道学園」で何科目かの授業をしていて、ラーメン太郎君とは顔見知りだった。太郎君は定員九名のクラスを一月余り受講。「電気理論・ブレーキ理論・ディーゼル機関・車両構造」等四科目の総合判定「良」。皆から囑望され、学級代表をも引き受けていた。

民営化のため国鉄は「出向社員希望者」を募った？

が、実際は、現場長に出向員数が割り当てられていた。

この時代の国鉄の状況を詩人の目でみた文章だった。彼がなぜ古文に関心を寄せたかは、後にだんだん分かってきた。古文書研究会の長期にわたる会員だった。

静かに酒を呑んで乱れることなし。

正確な筆書、表紙の絵、長年続いた古文書解読の会。古典への関心。締切日に遅れること一度もなし。私の事務所毎号合評会をしたが、ビーフジャーキーを持参し、紙コップで酒を呑んだあと、きっちりゴミ袋を用意してくれた谷田さん。

一度も彼と歌ったことはないが、赤松徳治君の葬儀でご子息の求めで、第三期層同人が歌ったことがある。谷田さんが人生の殆どを過ごした国鉄労働組合の歌を偶然にもぼくは歌えるので、谷田さんの霊前にそなえる気持ちで心のうちで歌う。「私たちは俺たちは 国鉄に生きています 正しい心と 赤い血の 通う手と手をしっかりと結び 国鉄労働組合の その旗のもと 明日を信じ働く者だ 国鉄労働者」このほか「街から村から 工場から」も国鉄詩人連盟の詩である。もう一曲歌って谷田さんを偲び、ご冥福を祈りたい。

■追悼 松尾さんの思い出

「詩と煙草はやめられない」

渡辺信雄

松尾茂夫さんが4月1日に逝去の報を永井ますみさんから受けた。松尾さんには40年近いお付き合いでお世話になった。個人的な思い出だが、私の初めての詩集『冬の日の私信』（摩耶出版社・1984年）ができて、その本を我が家まで運んでくれたのは松尾さんだった。初の神戸現代詩叢書シリーズでもあり、喜びを共有した。その後現代詩神戸研究会の「神戸詩画展」や「神戸市街図」の刊行で一緒した。何事もたんとと気張らないで、事をこなす人だった。

私が仕事の関係で事務局をしていた「第10回神戸ナビル文学賞」を、詩集『デンキブランで見た夢』で受賞されて、加古川の喫茶店でインタビューした。その時の雑誌をみると、写真は煙草を燻らして「詩と煙草はやめられない」と書いている。また、「熟成の語り口の十冊目モダニズムからリアリズムへ、物語性もつ詩」という見出しをつけている。詩集タイトルの「デンキブラン」とは、浅草にある神谷バー発祥のカクテルで、琥珀色の酒。明治大正から文壇の人達にも人気があったという。その酒のボケット壘を松尾さんから頂き、飲んだ記憶がある。「デンキブランの夢」の詩は、「元町2丁目あたりに デンキブランが売物のバーがあった」という。そこに登場する三鬼の愛弟子の編集者や宇宙食を研究する大学教授の話だが、妙なりアリエイがあった。排便からクロレラを作る想像力のユーモアに松尾さんの人間性を感じた。

輸入品の仕入れなどの仕事をされていたようで、ウイスキーなど洋酒にも詳しく、商売のやりとりのエピソードが詰まっていた。

1937年生まれて戦争体験もあり、もつとお話を聞きたかった。「現代詩神戸」や「別嬪」に詩やエッセイを書き、兵庫県現代詩協会の会長(事務局長を経て)など、詩と詩人の交流と運動に尽力された。また加古川を中心

として「播磨灘詩話会」をつくり、同人誌の垣根を超えて、詩の書き手を育て交流をめざす貴重なリーダーであったようにも思う。年譜を見ると「54歳で事業を清算し以後定職につかず」とあり、自由人として詩人の活動を続けられたのだろう。松尾さん、天国で好きな煙草を吹かし、ウイスキーを飲みながら、詩を書いてください。

■理事会報告

◆2月6日(土) 第5回常任理事会。県民会館にて。出席者十名*入退会(神田)逝去・谷田寿郎。現在一三〇名*会報(和比古)次号で谷田氏の追悼文を掲載予定。三宅武氏に依頼*読書会(丸田) 11月28日第19回「石牟礼道子の作品について」チャーター・丸田礼子。参加者28名。報告者・青木左知子*ポエム&アートコレクション展報告(神尾・北岡)講演「詩を書くということ」時里二郎。報告者・武内健二郎。参加者41名(コロナ禍のため入場者制限) 展示会来館者・137名。出展数・23点。来年度より会期中の当番交通費として500円を支給。展示パネルを増やしてほしいという希望*アンソロジー(大橋)『ひょうご現代詩集』2020第一五集。参加者100名。発行部数300部。発行日3月20日。定価三千元。会員は2000円*文学散歩(大西) 3月14日(日) JR姫路駅中央改札口10時。姫路文学館他。現在参加申込者9名。参加費2500円*役員選挙結果報告(山本) 新役員候補選出の28名に往復はがきで2月28日までに受諾を問う。常任理事12名、理事3名、監事2名を選出する*『ふれあいの祭典・詩のフェスタひょうご2021』(山本) 10月3日(日) 13時半~16時半、神戸市教育会館大ホールにて。講演及び朗読会。朗読会は新たに高校生部を設ける。各高校にチラシを送付*絵会(山本) 5月5日(水) 県民会館鶴の間に。議案・2020年度活動報告及び決算報告。2021年度活動計画案及び予算案。講演会、自作詩朗読会など。

◆3月20日(土)第6回常任理事会。県民会館にて。出席者10名*入退会(神田)入会は年会費振込確認後入会とする。入会予定1名*会計(玉川)2020年度会計監査は4月18日*『ひょうご現代詩集2020』(大橋)参加者百名。発行部数三百部。販売価格は会員送料込み2000円、一般価格3000円。詩のフェスタ朗読者に贈呈*文学紀行(大西)3月14日・姫路文学館及び姫路城周辺。参加者12名。姫路文学館『岸上大作展』見学後、阿部知二碑など散策。好評だった*会報49号(和比古)総会報告、谷田寿郎氏追悼文。50号は特別号として会報第1号からの執筆者よりピックアップして掲載*ホームページ(北野)総会案内、総会報告、文学紀行報告など。今後第1号からPDF化する予定*新役員の役割について*総会(山本)5月5日(水祝)県民会館にて。新役員承認、第一部・議案、第二部・講演会(講師・大西隆志)、第三部・自作詩朗読会。会員への案内状は4月10日発送。4月24日。懇親会は行わない。また緊急事態宣言中は中止、書面総会とする*詩のフェスタひょうご2021(山本)10月3日(日)予定。神戸市教育会館大ホール。講演会講師・高階紀一氏。自作詩朗読会是一般の部に加えて高校生の部を追加。

◆第40回理事会はコロナ禍のため書面理事会となった。新旧役員22名に、葉書にて議題の賛否を問い、結果賛成多数で総会議題とする。入退会・入会1名、退会2名。現在会員数129名。(文責・尾崎美紀)

■詩のフェスタひょうご2020朗読詩集より(続)

(48・49号で会員の詩を掲載)

女が老いる

西海ゆう子

―阪神・淡路大震災から考えたこと

あの震災は老いることが罪でもあるかのような試練を与えたまま
あれから日ばかりを重ねて行くが

老人が行く末をはかなんで自ら生命を絶つたり
また労らなくてはならないその老いた身を寒風に晒し病み衰えていく
やがて厳寒は酷暑に変わっても
自死も病死も震災故の結果とするならそれを防げなかったのは
次世代の汚点だと思ふ

そして更に辛いのは何故こうも老いた女ばかりが
その犠牲にならなければならなかったのか
八十年も生きてきた女性を ただそれだけでも素敵だと思ふ
女として生きることは随分しんどかったはず
生まれた頃は第一次世界大戦 娘時代に泥沼の侵略戦争
その益が回ってくるはずもなく害だけを被り
戦争で夫を失った若妻もいたはず

敗戦後の混乱の中で子どもを育てようやく人心地ついても
高度経済成長の恩恵を受けるに歳を取り過ぎ そのまま老いて来
た
幸せな老後であればそれで良い私の想像力も働かない 彼女た
ちが選んだのなら

けれど古い木造文化住宅に押し潰されさらに炎に焼かれて
そんな死を迎えることを彼女たちは望んでいただろうか
何故 老いた女ばかりがたくさんたくさん
こんな目に遭わなければならないのか

この世の不条理のすべてを背負ったような死
彼女たちはもう一言も発せない 生きていた時もうそうだったが
その声なき声をまず同じ女が聞かなくてなんとしよう

阪神・淡路大震災から四半世紀 天災であれ人災であれ 大災害
が繰り返された

災害は誰にも平等に降りかかるのでなく 弱者により厳しい
私も老いたがすべては老いる 同じ過ちを重ねてはならない心
して

*当時の「兵庫県立女性センター」資料より(犠牲者数は1995年4月
中旬の統計)阪神・淡路大震災の犠牲者の半数は60歳以上。性別は男性
が4割、女性が6割、年代は60代が2割、80代70代50代が1割を
超えた。年代と男女別では70代女性が最も多い。その理由として、被災
地は一人暮らしの高齢者が多かった。戦前や終戦直後に建てられた家屋が
多かった。

コロナの夏

山本真弓

ほえろ 吠えろ

子供も

大人も

犬も

音を失くした街

朝焼けの空

まだ鳥も蝉も鳴かない

木々も沈黙

電車が遠くに

月をさらっていく

微かな風に

心が揺れる

先ず長くなった髪を

一つにしばり

今日という一日を考えよう

淋しさも思苦しさも

空に吐き出し

何も書けない時は

マスクを作る

一針一針 沈静の祈り

八月は何て酷な月だろう

原爆投下 6日広島9日長崎

御巢鷹山日航機墜落 12日

敗戦告知 15日

今を見つめて

吠えろ ほえろ

臆病になるな

今こそ

あなたと分かち合いたい

今を生きる一瞬を

かけがえのない

一日の重さを

蝉が激しく鳴きだした

■他団体会報・詩書 (2020年11月～2021年5月)

すずかけ 12・1・2・3・4・5月号 (兵庫県芸術文化協会)

詩界通信 93号・94号 (日本詩人クラブ北岡淳子)

岩手県詩人クラブ会報第97号・98号 (照井良平)

山形県詩人会会報第36号 (柏倉千加志)

宮城県詩人会会報第32号 (竹内英典)

埼玉県詩人会会報第95号・96号 (北畠光男)

関西詩人協会会報第100号・101号 (左子真由美)

日本現代詩人会報No161・162 (黒岩隆)

とっとり詩人第41号 (池澤眞一)

長野県詩人協会会報No146 (八町敏男)

島根県詩人連合会報No89 (川辺真)

茨城県詩人協会会報No31 (碓杏子)

栃木県現代詩人会会報第77号 (貝塚津音魚)

宮崎県詩の会会報復刊47号 (谷元益男)

群馬詩人クラブ会報No316 (佐伯圭)

大分県詩人協会会報No159 (井手口良一)

中日詩人会会報No200 (古賀大助)

福井県詩人懇話会会報104 (渡邊本爾)

秋田県現代詩年間2021 (秋田県現代詩協会)

とっとり詩集第9集 (鳥取県現代詩人協会)

島根年間詩集第49集 (島根県詩人連合)

岐阜県詩人集第8集 (岐阜県詩人会)

九州詩人祭50周年記念誌 (大分県詩人協会)

第8回かなざわ現代詩コンクール受賞作品集

いしかわ詩人12集 (石川詩人会)

福島県現代詩集2021 (福島県現代詩人会)

埼玉詩集第18集 (埼玉詩人会)

高知詩の会通信24号 (長尾彰)

ココア共和国2021・3月号 (あきは詩書工房)

木立ち 冬第138号 (木立の会)

アンソロジー2020山吹文庫 (山吹文庫の会)

呼吸 特集「道」(現代京都詩和会)

潮流詩波265 (麻生直子)

Moderato51 (岡崎葉)

フラジャイル第11号 (柴田望)

『ひだまり』星まゆみ (フラジャイル)

『ほおずき』田中すずよ詩集 (編集工房ノア)

『海からきた猫』宮尾壽里子 (夢月堂)

PartPoemCD62・63 (中尾彰秀)

岐阜県詩人会会報第16号 (頼圭二郎)

福島県現代詩人会会報第125号 (齊藤貢)

■会員の発行書 (2020年11月～2021年5月)

『神戸・姫路の画家たち』芝本政宜 (柴田実)

(神戸新聞総合出版センター)

『倉橋健一の詩を繙く』牧田榮子 (濤標)

『霧の馬』紫野京子 (編集工房ノア)

『青をあおぐ』渋谷魚彦 (濤標)

『夢泥棒』高橋富美子 (思潮社)

『蝙蝠が歯を出して嗤っていた』猪谷道子 (濤標)

『発行樹林帯』高木敏克 (濤標)

『蒼き旅』和比古 (遊文舎)

『東北ミレニレぼーと』神田さよ (私家版)

■会員の詩誌・個人誌 (2020年11月～2021年5月)

RIVERB174・175・176 (横田英子・永井ますみ)

現代詩神戸272 (三宅武・永井ますみ・田中信爾)

別嬢113 (高橋夏男)

鶴鴿15 (江口節)

ア・テンボ58号・59号 (玉井洋子)

時刻表9号 (たかとう匡子)

ContactNo42・43 (坂東里美)

MeLange157～161号 (大橋愛由等)

ターミナル15号 (神田さよ)

Mesier54～57号 (香山雅代)

汽水湖第3号 (福永祥子)

まほろば第50号 (たかはらおさむ)

鳥 第80号 (なすこういち)

多島海37～39 (江口節)

EDGING48 (寺田操)

遥 3号 (和比古)

あむの木通信第139～147号 (福永祥子)

木想11号 (高橋富美子)

風の音21号 (野口幸雄)

■退会・逝去

退会：川田あひる、なすこういち、吉本弘子、

かただとき、逝去：谷田寿郎

■新入会員

入間しゆか (本名：折田恭平)

経歴『ココア共和国』2020年10月号 傑作選 『コ

コア共和国』2021年2月号

傑作選、所属詩誌『詩人第7世代』

住所 兵庫県尼崎市昭和通1-9-

50-405

TEL 090-6829-0069



桜、散る 入間しゆか

夜、目を覚ましたのを不眠のせいにしたくなかったから、大好きなシティポップをかけて、時がすぎるのを待った。

必死になって、社会の面目にしがみついているのに、春ですよと勝手に花が咲きやがる。
いいよな。嘘をつく口を持たない奴らは。と、ぼくは嘘をついたのに、聞こえないふりをした。ほんとうはつて言いかけて世界征服を諦めたんだ。

世界はさよならとはじめましての砂時計をひっくり返して遊ぶ。花が咲こうと散ろうと、ちっとも関わりがなかった。遠回りしてきたことを誰かのせいにするのをやめたい。

ほんとうは違う。ほんとうは違う。

ほんとうは違うって言ったけど違う。

ほんとうは違うって言ったけど違うのは、本質的に異なる。ほんとうは違うって言ったけど違うのは、本質的に異なるけれど、根本的に間違っているの、
そうなのかなあ。

首を傾げる。

桜、散る

■ イベント案内

◇日本詩人クラブ創立70周年記念大会「現代詩東西南北」2021年11月20日(土) 13時半、東京グランドホテル

◇紀の国わかやま文化祭2021 いわで「現代詩の祭典」2021年11月13日(土) 13時〜16時、旧和歌山県議会議事堂(一乗閣)

■ 詩賞について

◇第23回小野十三郎賞 対象:「詩集」または「詩評論書」。2020年7月1日から2021年6月30日まで
に刊行されたもの。応募期間:2021年4月1日から

7月10日、応募先:〒652-0012 大阪市中央区谷町7-2-2-305 大阪文学学校内小野十三郎事務局

◇第32回富田碎花賞 対象:2020年7月から2021年6月末日までに刊行された奥付のある詩集。ただし、翻訳、アンソロジー、復刻及び遺稿詩集、電子書籍は除く。応募先:〒659-8501 芦屋市精道町7-6 芦屋市教育委員会生涯学習課 富田碎花賞担当、応募期間:2021年5月1日〜同年7月31日必着

◇第32回伊藤静雄賞 原稿用紙2枚以内(題名も含む) 締切2021年8月31日迄(諫早市芸術文化連盟)

◇第27回中原中也賞 2020年12月1日から2021年11月30日までに刊行された現代詩集。締切2021年12月5日迄

詳しくは各ホームページなどをお読みください。

■ 会計より

今年度の会費は会員皆様のご協力により円滑に納入されています。有難うございます。未納の方は恐れ入りますが、納入よろしくお願い致します。

年会費は4000円です。

振替口座 00920・9・111243

口座名 兵庫県現代詩協会

(担当:玉川侑香)

■ 事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局までお送りください。イベント開催時(ポエム&アートコレクション展)などに「詩の現在展」として展示する予定です。また、詩に関するイベント情報の案内・会員の動静もお知らせください。

(担当:山本眞弓)

■ 兵庫県現代詩協会ホームページについて

当協会ホームページには、協会主催の行事や会員からのイベント等の情報を掲載しています。また会員各位からの情報提供、寄稿をお待ちしています。「兵庫県現代詩協会」で検索して下さい。

<http://hyogopoetry.sakura.ne.jp/main/>

(担当:北野和博 soranohi@yahoo.co.jp)

■ 担当

兵庫県現代詩協会事務局《山本眞弓》

〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15-2003

Tel 078-241-3086

会計《玉川侑香》Tel 078-361-1334

会報編集《和比古》Tel 0798-72-9308

印刷《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-1-7-31

Tel 06-604-9325

新入会員をご紹介ください

《兵庫県現代詩協会》は詩に関する幅広い行動を行っており、読書会、詩画展や文学紀行などお互いの交流を図っています。詩を愛する集いの場として、新たなつながりに参加希望の方を求めています。詳しくはホームページをご覧ください。問い合わせなどある方は下記までご連絡下さい。

入会申込 担当:事務局 山本眞弓

Tel 078-241-3086